

第2回 人生いろいろ、ファンドもいろいろ

一般の人に代わって、株式の購入を行うのがファンド(投資信託、投信)であり、その数は上場されている株式の数を上回ります。成長志向か安定志向か、国内型か外国型か、株式か債券か、はたまた両方が…。今の個人投資家たちにとって、ファンドを選ぶのは株式以上に難しいかもしれません。

ファンドには運用スタイルごとにアクティブ運用とパッシブ運用の2つがあります。アクティブ運用とは、市場を上回るリターンを目指す運用スタイルのことで、パッシブ運用とは市場に連動した(市場と同一の)リターンを目指す運用スタイルのことを指します。平たく言えば、アクティブ運用はファンドマネージャーが独自の運用するもので、パッシブ運用は市場のトレンドに合わせて機械的に運用するものです。ピーター・リンチのマゼランファンドはアクティブ運用にあたり、ETFやインデックスファンドはパッシブ運用にあたります。

どちらにも一長一短はありますが、基本的にハズレがないのはパッシブ運用です。アクティブ運用はファンドマネージャーが運用するため手数料がどうしても高くなってしまうというデメリットがあるからです。また、運用に成功することあれば失敗することもあります。

今回紹介するのは、そういった「普通の証券会社が売る普通のファンド」ではなく、普通の人は知らない中～上級者向けのファンドです。

元本確保型ファンド(元本保証型ファンド)

元本確保型ファンドは、コンピューターが市場のトレンドを察知して、数%上がったなら売り、数%下がったら損切りという機械的なトレードを行い、市場が閑散としている時はトレードを行わないという完璧なパッシブ運用を行っています。さらに、株式に投資してリターンを追及する一方で、安全性の高い債券を組み入れて、元本割れを防ぎます。そのため万が一運用に失敗したとしても元本だけは全て戻ってきます。もちろん運用が成功した場合にはそれ相応のリターンが約束されています。

ただ難点なのが、この種のファンドはクローズ型と呼ばれるもので、募集は1回きりで追加募集は行いません。また、途中で解約することができないファンドもあります(これと反対で、いつでも購入できたり解約できたりできるのがオープン型といいます)。また、宣伝しなくても顧客が集まってくるため、気付いたときには募集が終わっている、ということもあります。さらに、証券会社が扱っているしょぼいファンドと違って購入の最低単位が100万円単位であることが多く、ゴミレベルの個人投資家にとっては手を出しにくいのが玉に傷です。

実際に設定された元本確保型ファンド

元本確保100%、8年、ドル建・ユーロ建、格付けAAA欧州銀行保証

元本確保 100%、10 年、ドル建・ユーロ建・豪ドル建、格付け A A 欧州銀行保証
元本確保 100%、12 年、ドル建・ユーロ建・英ポンド建、格付け A A 欧州銀行保証
元本確保 120%、12 年、ドル建・ユーロ建、格付け A A 欧州銀行保証
元本確保 140%、14 年、ドル建・ユーロ建、格付け A A 欧州銀行保証

ヘッジファンド

さて、この元本確保型ファンドの正反対に位置するのが、“ヘッジファンド”と呼ばれるひたすら利益を追求するファンドです。海外のタックスヘイヴン（租税回避地）で設立されているため、自国からの課税を逃れるなどして運用されています。ただこのヘッジファンドは、投信と違って証券会社が運用するものではありません。わかりやすく言うと、個人投資家が友達からお金を預かって運用する、つまりヘッジファンド自体も証券会社の顧客なのです。そのため金融派生商品の取り扱いはなく、むしろ裁定取引などの個人レベルでも売買できる商品を対象にしています。つまりファンドマネージャーの積極的な運用にかかっているわけで、こちらは完璧なアクティブ運用です。

ヘッジファンドは証券会社の投信とは違い、運用手数料を「利益の○%」としているところが圧倒的です。その相場は大体 20～30%とかなり高額ですが、それは彼らがそれに値するリスクを背負っているからなのです。もちろん運用はハイリスクで、資金は一部の限られた富裕層のみから集められます。この手のファンドは元本確保型ファンドと同じく宣伝をほとんど行わないため、日の目を見ることはありません。ライブドアVSフジテレビのような、そういったニュースが報道されて始めて人の目に触れるのです。

主なヘッジファンド

クオンタムファンド

・前回説明したとおり、ジョージ・ソロスとジム・ロジャーズが始めた「ソロスファンド」が起源。あらゆる情報に目を通し、市場のトレンドを先読みして投資を行う。おそらく世界で最も儲けたヘッジファンド。現在、運用資産額は以前と比べかなり減っている。

だがクオンタムファンドがスゴイのは運用実績だけではなく、その資金によって設立された財団「オープン・ソサイエティ」。その名の通り「開かれた社会」を実現すべく、共産主義やアパルトヘイトなどに対抗するために寄付を行う。80 年代にハンガリー（ソロスの祖国）に寄付された例をみると、外貨を望む当時共産主義国家だったハンガリーに、年間200万ドルの寄付を行う一方で、学者を西側諸国に留学させて資本主義の考えを吸収させたり、寄付の代わりにコピー機の自由使用を認めさせたりすることで、共産党を政権の座から追いやった。ソロスはこのようにして、他にもロシアや東欧諸国に寄付を行い、ヨーロッパで最も影響力のある一市民となった。ソロスがファンドを後継者に委ねたのはこの活動に専念するためで、後継者が運用に失敗するたびに彼が代わりに運用を行った。

ちなみにソロスは最近の大統領選挙で、ブッシュ氏の対立候補であるケリー氏に多大な額の寄付を行ったらしい。

ロングタームキャピタルマネジメント L T C M

・1993 年ごろにスタンフォード大学教授マイロン・ショールズ、ハーバード大学教授ロバート・マートン

の2人のノーベル賞受賞者をはじめとして、多くの学者・専門家が設立した「ドリームチーム」。
運用スタイルは簡単にいうと、流動性が高い債券の裁定取引で、主に確率を基本とした運用方法。
名立たる専門家が集まったことで、世界一流の顧客や人脈、中央銀行や民間金融機関などから資金を調達し、ピーク時には1300億ドル(13兆円)以上の資金を動かした。
しかし確率論を基本としていた運用スタイルは、1998年に「火星人が到来する」という途方も無く低い確率で起こった事象と、20~30倍以上の借り入れ(レバレッジ)により破綻した。しかしFRB(米連邦準備理事会)のグリーンズパン議長はLTCMに何千億ドルもの資金援助を行った。LTCMの破綻の影響はあまりにも大き過ぎたからである。ただ大量のマネーが供給されたことにより金融市場では新たなバブルが生まれ、いっそう多くの人たちが被害を受けた。このLTCM破綻により、ショールズとマートンの2人のノーベル賞受賞撤回や、経済学賞自体の廃止の声まで上がったほど。

M & Aコンサルティング

・通称村上ファンド。ライブドアVSフジテレビで、お茶の間をにぎわした村上世彰氏が運用するファンドで、運用資産額は500億円以上。その投資スタンスは、ソロスのように「市場の非効率性に目をつける」というもの。例えば、今回のニッポン放送のように親会社が子会社よりも小さいとか、現金保有量が多いが株価が低迷している企業などに投資を行う。ちなみに1000万円あればこのファンドに投資できるらしい…。

タワー投資顧問

・今年100億円以上を稼ぎだした日本一のサラリーマン・清原達郎氏が運用するファンド。主に機関投資家の企業年金を運用している。投資スタイルは割安株投資で、運用資産額は2600億円ほど。清原氏自身は「運用部長」という肩書きでしかないが、運用に専念するために社長にならなかったらしい。

ジム・ロジャーズの金言コーナー

・投資するときは、とても注意深くあること。自分が本当に詳しいものにだけ投資すること。
他人からの「秘密情報」なんかで買ってはいけない

参考文献 『マンガ ジョージ・ソロス』(2004) 黒谷 薫(著) パンローリング
『マンガ ジム・ロジャーズ』(2005) 森生文乃(著) パンローリング

参考 AIC <http://www.alt-invest.com/>

確率論の入門基礎

<http://www.qmss.jp/prob/finance/6-ltcm.htm>

つばさの株式備忘録

<http://tsubasa.e-city.tv/index.html>

MSN-Mainichi INTERACTIVE

<http://www.mainichi-msn.co.jp/shakai/wadai/index.html>